

認知的操作がvisual analog scaleによる色嗜好測定に及ぼす効果(4)：新たな好嫌活性化課題を用いて

Effect of cognitive task on color preference measured by visual analog scale(4): Using a new generally-designed like/dislike-activation task

羽成 隆司 Takashi Hanari

椋山女学園大学文化情報学部

Sugiyama Jogakuen University

高橋 晋也 Shin'ya Takahashi

名古屋大学環境学研究科

Nagoya University

キーワード：色嗜好，認知的課題，VAS

Keywords: Color preference, Cognitive task, VAS (visual analog scale)

問 題

これまでわれわれは，色嗜好が成立するまでの心理過程に注目し，とくに認知的要因の重要性について検討してきた．たとえば，羽成・高橋(2004, 2005)，高橋・羽成(2005)では，色嗜好の判断に先立ち，特定の色の好嫌をより強く自覚させられる認知課題を与えられた群(実験群)は，これを与えられない群(統制群)に比べて，色嗜好のばらつきが増大するという特徴が認められた．すなわち，好きな色はより好きに，嫌いな色はより嫌いな方向に変動したのである．また，認知的要因の分析にVAS(visual analog scale)による色嗜好の定量的把握が有効であることも指摘してきた．^{1)~3)}

さらに前報(羽成・高橋, 2006)では，色には直接関係しない一般的事物にかんする選好判断を行う課題の効果を調べたが，ここでもその後の色嗜好判断が変動するという傾向が認められた．⁴⁾

本研究では，「好嫌を活性化させるという認知過程自体」が色嗜好の判断に影響を及ぼす可能性についてさらに検討を進めるため，前報に続き，一般的事物にかんする選好を判断させる新たな課題を設定して，これがその後の色嗜好判断にどのような影響を及ぼすかを分析した．前報では，単語対から好きな側を選択するという課題であったが，今回は好きなものと嫌いなものを強制的に分類させる課題を設定した．

方 法

調査対象：大学生233名(男性69名・女性164名)分のデータを分析対象とした．これを，後述の群分けにしたがって，実験群に139名，統制群に94名配置した．両群間での男女比および平均年齢(実験群:20.5歳，統制群:20.4歳)に統計的有意差はなかった．

認知課題：実験群に対しては，認知的操作として，5つのカテゴリーごとに10個の項目を呈示し，それぞれについて自身が好きと思うもの5個に○，嫌いと思うもの5個に×を付ける強制分類課題を行わせた．5つのカテゴリーは，国，球技，果物，動物，花で，それぞれのカテゴリーから一般的に親近性が高いと思われるものを選定した (Table 1)．

手続き：2段階の質問紙調査形式でデータ収集を行った．調査1では，全調査対象者に対して，赤，だいだい，黄，黄緑，緑，青，紫，ピンク，茶，白，灰，黒の12色名を質問紙上に呈示し，それぞれの好嫌度をVASで測定した．調査対象者は，各色について，「好き」と「嫌い」を両端とする長さ130mmの線分上に手書きでスラッシュを入れた．質問紙は12色名の呈示順序が異なる4種類が用意され，これらがランダムに配布された．

調査1の4週間後に調査2を行った．ここでは調査対象者を無作為に統制群と実験群に分けた．統制群には調査1と同様のVASによる色好嫌度評定のみを行わせた．実験群は上記の認知課題を行っ

Table 1 実験群に呈示された各単語群

カテゴリー1：国				
スペイン	イギリス	フランス	ロシア	ドイツ
カナダ	イタリア	アメリカ	オーストラリア	オランダ
カテゴリー2：球技				
ソフトボール	サッカー	バスケットボール	テニス	卓球
ラグビー	バレーボール	バドミントン	野球	ゴルフ
カテゴリー3：果物				
ぶどう	もも	メロン	いちご	なし
バナナ	パイナップル	みかん	キウイフルーツ	りんご
カテゴリー4：動物				
くま	ライオン	ぞう	ペンギン	たぬき
とら	りす	きつね	きりん	らくだ
カテゴリー5：花				
カーネーション	桜	菊	チューリップ	ばら
あさがお	ゆり	たんぽぽ	ひまわり	あじさい

た直後にVASによる色好嫌度評定を行わせた。

データ処理：VAS評定について、スラッシュの位置を計測後、「嫌い」の側の端が0、「好き」の側の端が100となるよう数値化し、回答者ごとに12色の平均値、標準偏差などの統計量を求め、調査1と調査2の間の変化量を中心に分析した。

結果と考察

色嗜好の全体的傾向：各色のVAS評定値（調査1の結果）をTable 2にまとめた。上位4色の順位や、黄緑や灰が下位になった点などは、これまでのわれわれの報告と同じであった。ただし、今回はとくに黒と白の突出が顕著であった。

Table 2 12色のVAS評定平均値および標準偏差（調査1）

順	色	平均値 (SD)	順	色	平均値 (SD)
1	黒	81.10(18.87)	7	黄	58.89(21.86)
2	白	79.12(20.08)	8	緑	57.70(22.54)
3	青	66.84(21.96)	9	茶	57.34(24.17)
4	赤	65.39(24.88)	10	紫	55.24(25.66)
5	ピンク	61.65(28.97)	11	灰	52.10(24.89)
6	だいだい	60.31(22.66)	12	黄緑	49.44(23.76)
最好色*		93.47(8.05)	最嫌色*		24.76(15.82)

*最好色は、各回答者におけるVASの最大値。

最嫌色は、各回答者におけるVASの最小値。

また、12色全体の平均値と標準偏差の間に負相関が認められた($r = -.337, p < .01$)。全般的に色を高評定する者ほど好き嫌いの差が小さく、一方、低く評定する者ほど好き嫌いの差が大きいことがあらためて示された。この傾向もこれまでの結果を確認するものである。

色嗜好の再現性：4週間を挟んだ2度の色嗜好評定の個人内再現性を検討するため、各調査における12色のVAS評定値を順位値に変換し、回答者ごとにSpearmanの順位相関係数を求めたところ、全体の平均は $r_s = .589$ となった。この結果もこれまでの報告とほぼ同様であり、個人の色嗜好は必ずしも頑健なものではないことがあらためて示された。

認知課題による色嗜好の変動：各回答者の12色のVAS評定値における平均値、標準偏差、最大値、最小値の調査間変化量（調査2のVAS評定値から調査1のVAS評定値を引いた数値）について、1要因分散分析で実験群と統制群の差を検定した。その結果、標準偏差の変化量において、有意な傾向が認められた（実験群： $.46$ ，統制群： $-.92$ ， $F = 3.66$ ，

$df = 1, 231, p < .10$ ）。一方、平均値、最大値、最小値の群間差は有意ではなかった。すなわち、12のVAS評定値の全体的水準の変動について群間差はないが、実験群においては、2回目の好嫌度評定のばらつきがより大きくなった。好きなものと嫌いなものを分類するという認知課題を行ったことが、「好き／嫌い」という対立的な認知図式を活性化し、これがその後の色好嫌判断における好き嫌いの差を拡大したと思われる。

羽成・高橋（2004, 2005）、高橋・羽成（2005）では、色の好嫌判断に先立つ認知課題として、最も好きな色と嫌いな色を選択させ、その理由を記述させるものを設定した。ここでも、標準偏差に有意な群間差が認められた。この課題は、いわば色の好嫌を「直接的」に活性化させる課題であった。しかし、本研究は色に直接注意を向けさせるのではなく、一般的な事物に対する好嫌判断を求める課題であり、活性化の影響は「間接的」なものであると思われる。この課題では、好きとも嫌いとも判断できるような一般的事物に対して、その多様なイメージの特定の一部分を活性化させることによって好嫌の強制分類が行われたと考えられる。それは自由かつ文脈依存的なトップダウン処理に負うところが大きく、たとえば触刺激や臭いが与える快不快感情のような刺激規定性の高いボトムアップ処理とは大きく異なるものであろう。

このようなトップダウン的で間接的な活性化の影響が認められたことは、色嗜好もまたトップダウン処理の結果に依存するものであり、本認知課題で提示したような一般的事物に対する「好き／嫌い」と同次元の対立的認知図式に従うものであることを示唆している。

参考文献

- 1) 羽成隆司・高橋晋也：認知的操作がvisual analog scaleによる色嗜好測定に及ぼす効果：色好嫌の活性化課題を用いて(1)。日本色彩学会誌，28(2004, Supplement)，48-49。
- 2) 羽成隆司・高橋晋也：認知的操作がvisual analog scaleによる色嗜好測定に及ぼす効果：色好嫌の活性化課題を用いて(2)。日本色彩学会誌，29(2005, Supplement)，48-49。
- 3) 高橋晋也・羽成隆司：色嗜好表出における認知要因。日本色彩学会誌，29-1(2005)，14-23。
- 4) 羽成隆司・高橋晋也：認知的操作がvisual analog scaleによる色嗜好測定に及ぼす効果(3)：一般的な好嫌活性化課題を用いて。日本色彩学会誌，30(2006, Supplement)，106-107。